

議会へのタブレット端末導入

議会改革等特別委員会



議会改革等特別委員会は6月16日（木）、下伊那郡高森町議会において「議会へのタブレット端末導入について」の視察研修を行った。

小平議長・岩口副議長・市川議会運営委員長ほか大勢の議員・議会事務局から説明を受けた。坂城町と同じくらの町村規模である高森町は、平成30年に議会全員協議会で「議会のICT化の研究」が検討課題と

して提案され、議会運営委員会、議会改革推進特別委員会で勉強会の計画、研究を始めた。平成31年に、効果的なペーパーレス化を進めるため、町も一緒に導入するよう要望書を提出。その後、先進町議会への視察や、各種勉強会、導入までのスケジュールを決め、令和2年4月の全員協議会からペーパーレス会議をスタート、同年6月議会定例会より本稼働が始まった。

今回の視察でタブレット端末導入により果たそうとする目的・解決しようとする課題、導入までの経過について詳しく説明を受けた。

高森町では、区長会・農業委員会でも既に導入されていて、目に見えないメリットが非常に大きいということであった。坂城町議会でも積極的に導入したいと思う。

（衞津 明子）

中心市街地のにぎわい創出

坂城駅周辺活性化特別委員会



鉄の展示館、中心市街地コミュニティセンター西側

坂城駅周辺活性化特別委員会は8月23日（火）、一昨年10月に町が取得した鉄の展示館西側の土地の調査を行った。

昨年度、町は隣接する地区の区長、商工会などの関係者と懇話会を行い、取得した土地の活用に向けて検討等を行った。当面、この土地については、建物を除却したうえで駐車場として活用

し、将来的には、駅前で行われるイベント時にも利用できる場所として考えていくとのことであった。

今年度の事業として、5月よりこの土地に残っていた母屋、蔵の除却及び土地の整地等が始まり、8月に工事が完了した。更地になった土地を、実際に調査してみると、坂城駅周辺で人々が集うことができ、賑わいの創出が可能な場所であると感じた。同時に、担当課への質疑も行われたが、当委員会として再三ではあるが、関わりのある町の様々な団体等と協議を積み重ねていき坂城駅周辺の活性化につなげて欲しいと強く要望した。

この土地の活用が、鉄の展示館等の文化施設、商業と合わさった活性化の起爆剤になる一つのキーになることに期待したい。

（衞津 明子）

町村議会広報研修会

広報発行対策特別委員会



9月21日(水)、東京の砂防会館で行われた町村議会広報研修会に委員全員で参加した。

今回の研修会で行われた3つのテーマの中で、一番興味深かったのは、上場企業の広告媒体制作や行政・議会を中心に広報セミナーの講師を務めている吉村潔講師の「優秀議会広報クリニック3つの議会広報が教えてくれること」であった。

岩手県岩泉町、埼玉県寄居町、そして福岡県大

刀洗町の3町の議会報を例に、講師からそれぞれの議会報の良い点や特徴についてのコメントがあった。

例示された議会報は共通して、町民が多く参加(登場)しており、紙面の端々に町民の顔写真やコメントなどが紹介され、読者(町民)の目を引く記事となっていた。

また「見出し」を工夫することで文章を少なくし、読みやすい記事になっていることも特徴的である。

私が特に印象的だったのは寄居町の議会報である。制作に議員、議会事務局以外の外部の方が加わったり、一般質問のページに過去に関連する質問がいつだったかを記載していたり、とても工夫されていた。

今後より読みやすく、読み手に伝わる議会報を作るため、より一層の努力をしていきたい。

(山城 峻二)

研修報告

町議会主催の議員研修会を開催

「コロナ禍の教訓を地域づくりに生かす
— 地域・自治体の視点から —」

講師 京都大学名誉教授・京都橋大学経済学部教授 岡田 知弘氏

「コロナ禍で国の無能状態が明確になる中で、本来あるべき地方自治体の姿が見えてきた」

8月19日(金)に行われた議員研修会における講師の京都大学名誉教授岡田知弘氏の言葉である。グローバル化、効率優

先による経済政策「選択と集中」による大都市への人口集中、「身を切る改革」と称しての、行き過ぎた公務員削減と民営化等一の負の側面が露呈したのが、この「コロナ禍」であった。

特別給付金の給付の遅れ、ワクチン接種の混乱等に見られる大都市の惨状に比べ小規模自治体の優位性が際立っていた。

その例として北海道東川町の給付金の給付における迅速さや過去に公害で苦しめられた四日市市の医療体制の充実ぶりなどが紹介された。

コロナ後の政治、経済、社会の在り方は「地元の地域に視点を置き、いかに住民、企業、商店、農家に住民、企業、商店、農家が連携して地方自治体が連携して地域内再投資力を持った内部循環型経済を創り出していくことである」。そういった取り組みの事例のひとつに「由布院」が取り上げら

れていた。隣の別府の大規模温泉施設には背を向け、昔ながらの景観を保ち、農商工連携で今では年間400万人の観光客を引きつけている。

こうした事例を今後参考にしていきたい。また、詳しく述べる紙幅はないが、この「由布院の小さな奇跡」を引き起こした人々の中に文芸批評家の小林秀雄がいたことは一言付言しておきたい。

(栗田 隆)

